

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 21 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520311

研究課題名（和文） 明治期ドイツ学の成立と展開

研究課題名（英文） The Establishment and Development of the Study of German Literature and Culture in Meiji-Era

研究代表者

中 直一（NAKA NAOICHI）

大阪大学・大学院言語文化研究科・教授

研究者番号：50143326

研究成果の概要（和文）：

本研究は、(1)日本におけるドイツ文学やドイツ関係の研究書の翻訳書誌を再検討し、また(2)明治時代においてドイツ学に関心を示した人物像の研究を目的とした。

ドイツ文学の日本における翻訳を分析した結果、明治時代にドイツ文化がどのように受容されたのかという傾向性が明らかになり、またドイツ文化受容の人的側面を考察することにより、ドイツ学の成立に対して政治家による影響が存在することが明らかになった。また明治時代の日本におけるドイツ学と英学を対比的に比較することにより、日本におけるドイツ文化受容の特質が解明された。

研究成果の概要（英文）：

The aim of my study is twofold: (1) To inspect bibliographies of the translations and studies of German literature in Japan, and (2) to survey who had interest to German culture in Meiji-era.

By analyzing translations of German literature, I revealed the tendency of the reception of German culture in Meiji Japan, and by surveying personal side of the reception of German culture, I also revealed that some politicians exercised influence toward the establishment of German studies in Meiji Japan. By comparing translations of German literature with those of English literature in Meiji Japan, I researched into the nature of reception of German culture in Japan.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
2012 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：比較文学、独文学

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究の発端

本研究の発端は、1990年にさかのぼる。その年、アジアで初めて国際ドイツ文学会が東京で開催され、世界の独文学者が来日した

が、その国際学会の同じ会場で「日本におけるドイツ語文化回顧展」が開催された。この展覧会では、現存する日本最古の独和辞典や明治期の翻訳書など、非常に貴重な書籍が展示された。研究代表者は、同展覧会の準備の一端を担い、日本各地の図書館等に存在する古書の調査および借り出しを担当し、それを契機に、幕末から明治期にかけてのドイツ文学・ドイツ文化受容に関する貴重な一次資料が日本国内に散在すること、しかもそれらがほとんど研究対象とならないままに眠っていることを知った。

1991年以降、研究代表者は江戸時代の来日ドイツ人であるケンペルの研究と平行して、幕末から明治にかけて、日本でドイツ文化がどのように受容されてきたかを研究してきたが、その途上で明らかになったことは、日本における英学研究・フランス学研究に比して、ドイツ学研究が非常に遅れている、ということである。わが国の独文学者の中で、日本におけるドイツ文化受容に関心を持つ人が非常に少ない。このような現実が、研究代表者をして本研究を着想せしめる動因となった次第である。

(2) これまでの研究成果との関連

本研究開始までに、研究代表者には以下のような研究成果があり、これらの研究成果が本研究の背景を為した。

① 1994年の論文「明治期の独逸学——文教政策を中心に——」において、研究代表者は日本ドイツ学成立の背景に、井上毅を代表とする当時の文部官僚たちによる強烈なドイツ学推進政策があったことを明らかにした。

② 1995年の論文「正則と変則——独逸学と英学の対比」では、ドイツ学と英学における学問観の相違が「正則・変則」という学習過程の相違に反映していることを明らかにした。

③ 2002年の論文「明治時代の語学教育をめぐって」では教育制度の変遷の中で第二語学としてのドイツ語がどのような運命をたどったかを解明した。

このように研究代表者のこれまでの関心は、教育制度や文教政策の中でドイツ学を見る、という点にあったが、今回の研究では、散逸の危機にある古書データの収集を基軸に、ドイツ学の成立と展開の実態を書誌的側面と制度的・人的側面の両面から解明しようとした。

2. 研究の目的

(1) 書誌データの総合点検

明治期のドイツ文学翻訳に関する書誌は、

その多くが「先行する書誌に基づき、これを増補する」という方針で作成されていた。そのような書誌には、実は案外に間違いが多い。本研究では、「現物に基づく書誌」の作成を目指した。そのため、研究経費の多くを貴重古書のPDF化にあて、3年間の研究期間において「現物に基づく書誌」の作成を目指した。

このように、書誌データを確実に蒐集することが、本研究の第一の目的である。

(2) ドイツ学の人的側面からの研究

明治時代の前半は、日本ではまだ学問としての「ドイツ文学研究」が成立していなかった。それゆえ山田郁治のような高等学校ドイツ語教師の他、たとえば森鷗外のような医学関係者、井上毅のような文部官僚など、実に様々な人々がドイツ学を担っていた。本研究は、単に独文学者を研究するのではなく、文部官僚をも含んだ幅広い層の人々に焦点をあて、3年の研究期間において、彼らが残した文献の徹底的な収集・分析をはかった。

このように、ドイツ学に関する人的側面からのアプローチが、本研究ももう一つの重要な目的である。

3. 研究の方法

(1) ドイツ学についての総合的研究方法

ドイツ学全般を網羅した総合的研究としては、田中梅吉氏、鈴木重貞氏の先行研究がある。これらはドイツ学研究者がまず参照すべき貴重な研究であるが、研究代表者はこれらの研究に加え最近の研究成果を補充するという研究方法を採用した。

(2) 書誌的研究方法

明治期の翻訳に関しては、ドイツ文学に限定した書誌的研究は少なく、西洋文学一般の書誌の中に組み込まれた研究が多い。代表的なものとして柳田泉の明治翻訳書誌が挙げられる。研究代表者は、ドイツ文学に限定する代わりに、先行する諸々の書誌データを再調査し、すべて翻訳現物に当たって確認した上で、正確な書誌データ作成を計画した。そのため、本研究においては、一次文献のPDF保存を行うという書誌学的研究方法を採用した。

(3) ドイツ学者についての研究

先行研究である上村直己『明治期ドイツ学者の研究』は、明治期のドイツ語教師たちに光をあてた貴重な仕事である。研究代表者は、この研究の成果を最大限に利用しつつ、ドイツ語学者以外の人々がドイツ学に向けた関心にも焦点をあて、日本の文部官僚や政治家がドイツ文学・ドイツ文化に何を期待し

たのかについて研究を進めた。ドイツ学者という、人的側面からの研究を進めたことが、第3の研究方法である。

4. 研究成果

【1 研究期間中に得られた全般的な成果】

(1) ドイツ学関係翻訳の特質の解明

明治期の翻訳のうち、初期のものは、ドイツ学のものに限らず、時に「義訳」、「乱訳」あるいは「豪傑訳」と称せられるように、必ずしも原典に忠実な翻訳ばかりとは限らなかった。本研究では、井上勤の初期の翻訳や、明治10年代後半から立て続けに訳出された『ヴィルヘルム・テル』の自由な翻訳ぶりについて研究を進めた結果、明治初期の翻訳者が、同時代の日本人読者を外国文学の世界に誘うために、様々な翻訳技法をこらしながら、時に原文にない語句や文章を訳文に織り込み、これを一種の緩衝材として、外国文学の世界を日本に普及せしめようとした実態が明らかになった。

(2) ドイツ学者の研究

ドイツ学を担った人々を調査した先行研究は若干存在するが、本研究においては、書誌と人的側面の両面をあわせて調査対象とした。この点において先行研究とは異なる。「書誌は書誌、人は人」という分断された考え方でなく「文献の背後にある、執筆者の人的志向」を解明した。

(3) ドイツ学と英学の接点

本研究においては、ドイツ学を英学との対比において研究を進めた。明治期のドイツ文学邦訳のかなりの部分は、実は英語からの重訳である。つまり英学畑の人々がドイツ文学の導入に与って力あったわけであり、英学の動向を無視してドイツ学のみを見るのは、じつは不十分である。本研究では、英学研究成果を十分に活用しつつ、日本ドイツ学の特質を解明した。

【2 各年度における研究成果】

《平成22年度》

(1) 資料の電子データ(PDF資料)化

ドイツ学およびドイツ学に影響を与えた英学に関する貴重資料として、以下の書籍を電子データ(PDF資料)化した：『和訳獨逸辞典』(春風社)、『英和字彙』、『英和対訳袖珍辞書(全)』、『和譯英辭書』、澁江保『獨佛文學史』(明25)、久松定弘『獨逸戯曲太意』(明20)、村田勤『路錫』(明23)、寺田勇吉・保志虎吉『獨英和三對小字彙』(明16)。またすでに画像データと所持しているもののうち、以下のものをPDF資料化した：中村順一郎『獨逸辨語啓蒙』、福富淡水『獨逸英吉利洋學訓

蒙』、Die ersten Lectionen des deutschen Sprachunterrichts(大學南校)、『獨逸訳附單語篇』(明4)、『英獨横文字早學』(明4)、前田利器『註解獨逸單語篇』(明4)、中村順一郎『獨逸單語篇和解』(明4)、『獨逸語學篇』(明4)、森田靖之『獨逸捷徑七以呂波』(明4)、大樞逸人『日耳曼字十躰いろは』(明4)など。

(2) 明治期ドイツ文学翻訳の特質の解明

明治期の翻訳作品の特質を解明するため、森鷗外『玉を懐いて罪あり』を対象として、原文および現代語訳、英語訳を対比して研究を進めた。その結果、鷗外がかなり大幅な省略を行って翻訳していること、またその際原文の複数の文章をまとめて一つの訳文にしたり、あるいは原文の後ろの部分に出てくる事柄を取って訳文では前に出していることなどの特質が明らかになった。

《平成23年度》

(1) 資料の電子データ(PDF資料)化

前年度に引き続き、ドイツ学およびドイツ学に影響を与えた英学に関する貴重資料として、以下の書籍を電子データ(PDF資料)化した：雑誌『獨逸語初歩』、雑誌『獨逸語學雑誌』(第11年、第13年～第22年)、雑誌『獨逸語』、日本獨文學会『獨逸文學』(第1号～第20号)、『日本學士院紀要』、『市川文吉送別文集』について、『エルンテ』(全21冊)、『諸厄利亜興學小筈』等。なお『日本學士院紀要』、『市川文吉送別文集』については、幕末・明治初期のドイツ学者である市川齋宮が書いたドイツ語文の翻刻およびその解説文を含む。

(2) ドイツ学を推進した人物についての研究

明治時代を中心に、ドイツ学を推進した人物についての調査を行った。その結果、文部官僚である井上毅が明治10年代に積極的にドイツ学を推進する立場を取ったことが明らかになった。井上毅は、自由民権運動に対抗する立場を取っていたが、彼によれば自由民権運動の背後には英学やフランス学といった学問があるとされた。英学やフランス学に対抗し、日本の政治風土に適合した学問として、井上はドイツ学を推進した。第二に、ドイツ文学の導入に大きな功績を残した森鷗外について、とくにその翻訳に着目し、彼の翻訳技法が時代によってどのように変化したかを調査した。その結果、日本の大学で独文学科が成立する以前の段階では鷗外の翻訳も大意を大づかみにするという態度に導かれていたが、明治後期にいたると、鷗外の翻訳もきわめて厳密なものとなったという実態が明らかになった。本年度の研究では、井上毅や森鷗外の他、獨逸学協会学校で実際にドイツ語を教授した大村仁太郎、日本で初

めてのドイツ文学概説書を書いた澁江保の
実績もあわせて調査し、彼らについての伝記
的情報を収集した。

《平成24年度》

(1) 資料の電子データ (PDF 資料) 化

平成22年度、23年度に於いてすでにかなり
多くのドイツ学関係書籍のPDF化を果たし
たが、当該年度も、散逸の危機にある明治期
のドイツ文学翻訳書や古い雑誌などの点検
を行い、電子データ化するものを電子デー
タ化した。電子データ化したものには以下の
ようなものがある：日本獨文學会『ゲーテ生
誕200年記念 ドイツ文學特輯』、『獨逸文學』
(東京帝國大學獨文學科／郁文堂版) 1~3号、
レーマン校閲『和獨對譯字林』(明9)、雑誌
『カスタニエン』第1~第19号、及び同雑誌
改巻第1~第6号、ゲーテ原著『獨逸奇書 狐
の裁判』(明17)、ゲーテ原著『禽獸世界 狐
の裁判』(明19)、シラー原著『春雪瑪列御最
期』(明21)、ハウフ原著『妖怪船』(明20)、
『獨逸文壇六大家列傳』(明26)、高木伊作『ゲ
ーテ』(明26)、『欧米名家詩集』(明27)、『ヘ
ルマン、ウント、ドロテヤ』(明34)、登張竹
風『ニイチェと二詩人』(明35)。

(2) 英学とドイツ学の接点

当該年度においては、ドイツ学のみならず
をあてるのではなく、英学とドイツ学の相互
関係について調査を進めた。ドイツ学と英学
の関係については、従来ほとんど研究がなさ
れていない。したがって、本研究においては、
さまざまな問題点を指摘し、とりわけ英学
畑の人々がドイツ文学をどのように翻訳した
かについて調査を進めた。

その結果、英学関係者である井上勤がゲ
ーテの『ライネッケ・フックス』を『獨逸奇
書 狐の裁判』と題して訳した翻訳書が、翻
訳技法の点で注目に値する、という結論を
得た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者
には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 中直一、ドームによるケンペル『日本誌』
の編集について(2) — 第1巻の分析(そ
の2) —、ドイツ啓蒙主義研究、査読無、
Vol. 12、2012、pp. 1-10
- ② 中直一、日独修好150年によせて、ドイ
ツ文学論攷、査読無、Vol. 53、2011、
pp. 91-94
- ③ 中直一、ドームによるケンペル『日本誌』
の編集について(1) — 総説及び第1巻
の分析(その1) —、ドイツ啓蒙主義研
究、査読無、Vol. 11、2011、pp. 1-22
- ④ 中直一、ビュッシング『週報』誌におけ
るケンペル『日本誌』出版報道(後編)、

ドイツ啓蒙主義研究、査読無、Vol. 10、
2010、pp. 1-12

[学会発表] (計1件)

- ① 中直一、翻訳に対する態度、日本文体論
学会秋季50周年記念大会シンポジウム
「翻訳と文体」(於：関西外国語大学)、
2011年10月22日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中 直一 (NAKA NAOICHI)

大阪大学・大学院言語文化研究科・教授

研究者番号：50143326

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：